

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
3 3 1	独立行政法人酒類総合研究所
題名 (原題/訳)	
<p>Alcoholic beverages and incidence of dementia: 34-year follow-up of the prospective population study of women in Goteborg.</p> <p>アルコール飲料と認知症の発生率：ヨーテボリの前向き女性住民調査の34年間の追跡調査</p>	
執筆者	
Mehlig K, Skoog I, Guo X, Schütze M, Gustafson D, Waern M, Ostling S, Björkelund C, Lissner L.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Am J Epidemiol. 2008 Mar 15;167(6):684-91.	
キーワード	
アルコール飲料、認知症	
要 旨	
<p>本研究の目的は異なった種類のアルコール飲料（ワイン、スピリッツ、ビール）摂取と34年間の認知症の追跡調査との関連を調べることである。1968-1969年にヨーテボリに住んでいた38-60歳の1,462名の女性の中で、164名が2002年までに認知症と診断された。1974-1975年、1980-1981年、1992-1993年にベースライン調査を行い、アルコール摂取頻度やその他の生活様式や健康因子を記録し、ベースラインの結果と最新の共変量を用いてCox比例ハザード回帰で認知症との関連を調べた。この結果、ワインが認知症に対して保護効果を持つことがわかり（危険率0.6、95%信頼区間：0.4, 0.8）、この相関はワインのみを摂取する女性で最も強くなった（危険率0.3、95%信頼区間：0.1, 0.8）。喫煙による階層化後、喫煙者においてワインの保護効果がより強く見られた。対照的に、ベースラインにおいてスピリッツの消費はわずかに認知症リスクを上昇させた（危険率1.5、95%信頼区間：1.0, 2.2）。これらの結果はワインとスピリッツが認知症に対して逆の相関を持つことを示している。他の酒類には保護効果が認められなかったため、ワインで見られた相関の一部はエタノール以外のワイン成分によるものではないかと考えられる。</p>	